

万葉集にやまとことばの起源を探る

古事記、日本書紀、万葉集は漢字だけで書かれている。その漢字だけの世界に日本的なものを見出し、日本文化の独自性を強力に主張したのは本居宣長であった。

本居宣長は『うひ山ふみ』のなかで『道を学ばんと心ざすともがらは、第一に漢意、儒意を、清く濯ぎ去て、やまと魂をかたくする事を要とすべし。』と論している。

神の御典（みふみ）のなかに「やまとごころ」を見出そうと本居宣長は三十五年の歳月をかけて『古事記傳』全十七巻を書きあげた。漢字だけの世界に隠れている美しい「やまとことば」を復元しようとしたのである。



本居宣長自筆画

万葉集の時代

万葉集は759年ころ成立した。高松塚古墳は古墳時代後期のものでおよそ700年ごろに作られたものと考えられているから、万葉集の成立はそのわずか50～60年後のことである。

万葉集の成立より早い751年には、漢詩集『懷風藻』ができていた。「やまとごころ」を詠った万葉集よりも、中国語の詩集である『懷風藻』のほうが先にできたのである。万葉集の歌人のなかには『懷風藻』に漢詩を残している人が何人もいる。「やまとことば」で歌を作るばかりでなく、中国語の詩を書ける人がいた。

懷風藻が宮廷文化を反映しているのに対して、万葉歌は、「やまとことば」しか話さない層も含めた、幅広い層の歌をおさめている。万葉集には、東歌や防人の歌など、漢字文化と接点のない人々の歌も含まれている。万葉時代の日本人の言語生活は三つの層から成り立っていたと考えることができる。

1. 漢字文化に造詣が深く『懷風藻』に漢詩を載せた宮廷人。(藤原不比等、葛野王、釈智蔵、釈弁正、百済和麻呂、調老人、大神安麻呂、采女比良夫、)
2. 『懷風藻』には漢詩を載せ、『万葉集』には和歌も残した。(大津皇子、文武天皇、河島皇子、大伴旅人、長屋王、境部王、藤原宇合、大神高市麻呂、)
3. 『万葉集』にのみ和歌を残した人びと。(柿本人麻呂、山部赤人、額田王、天智天皇、天武天皇、高橋虫麻呂、笠金村、大伴坂上臈女、山上憶良*、)

万葉集と懷風藻

大津皇子は『万葉集』にも歌を残し、『懷風藻』には漢詩を残している。

[万葉集の歌]

大津皇子、被_レ死之時、磐余池陂流_レ涕御作歌一首

百傳 磐余池爾 鳴鴨乎 今日耳見哉 雲隱去牟 (万四一六)

[読み下し]

大津皇子の被死(みまか)らしめらゆる時、磐余の池の陂(つつみ)にして涕(なみだ)を流して作りましし御歌一首

ももづたふ 磐余(いはれ)の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ

[懷風藻の漢詩]

五言 臨終 一絶

金烏臨=西舎一 金烏(きんう) 西舎(せいしゃ)に臨み

鼓声催=短命一 鼓声(こせい) 短命を催(うなが)す

泉路無=賓主一 泉路(せんろ) 賓主なし

此夕誰家向 此の夕 誰が家にか向ふ

歌も漢詩もいずれも臨終の作である。万葉集の歌では日本の歌の伝統に従って、季節の微妙な移り変わりに心を動かし、美しい自然を愛惜する心情と、死にたいする自分の思いを重ね合わせている。これにたいして、漢詩では当時宮廷を中心に広がりつつあった、仏教の思想が色濃く映し出されている。

言語表現のうえでも、万葉集の歌は「ももづたう」という枕詞にはじまり、「雲隠りなむ」という隠喩で終わっていて、事物を直接的に表現せずに余韻を重んずる「やまとことば」の伝統をふまえている。歌は「毎年北方から飛来する無心の鴨が何かを予知したかのごとく鳴いている。鴨は来年もまたやって来るであろう。しかし、私は今日を限りにこの鴨を見るのがなくなるであろう」という感慨がこめられている。

漢詩はもっと観念的で、「西舎」「泉路」など仏教の概念が織り込まれている。「日は西方浄土に傾き、うち鳴らす太鼓の音は、はかない命のリズムを刻む。黄泉の路には賓(まろうど)も主(あるじ)もない、この夕べどこに宿を求めればよいのやら。ひとりわが家に別れを告げるのみ」と解釈できる。漢詩は歌より観念的で、かつ明示的である。

万葉歌は中国語に翻訳しても漢詩になりえないし、漢詩はそのまま日本語にしても万葉の歌にはなりえない。漢詩は脚韻こそ踏んでいないものの、大津皇子が日本語と中国語を使いこなす、バイリンガルであったばかりでなく、日本文化の伝統と中国や仏教思想に深いかわりをもっていたことを、うかがわせるに十分である。

「詩賦の興隆は大津に始まる」というのは大変な賛辞である。大津皇子は「やまとことば」で歌を作り、中国語で詩を書いた。漢詩は宮廷の社交場である詩宴で、長屋王を中心に作られ、披露された。漢詩は限られた支配階級の文化であり、詩宴に招かれたのは当時の知識人の代表である僧侶、貴族のみであった。宮廷では官吏の服装も唐の装束をそのまま写したものであった。唐の官吏にならって漢詩を作ることが、官吏の重要な仕事のひとつとされていた。唐代の中国では、風格のある詩を作ることは、儒者の仕事のなかで最も重要視されていた。よい詩が作れなければ科挙の試験に通らないばかりでなく、儒者としての資質を疑われることにもなりかねなかった。万葉人もまた、中国の伝統に則って、詩作にしのぎを削った。この時代の宮廷の風俗は、唐の文化を規範としており、高句麗、百済や新羅の宮廷文化も大和朝廷と同じであった。

柿本人麻呂とは誰か



三十六歌仙の柿本人麻呂

●楽浪之 思賀乃辛碕 雖二幸有一 大宮人之 船麻知兼津 (万30)

●東野炎 立所レ見而 反見為者 月西渡 (万48)

●皇者 神二四座者 天雲之 雷之上尔 廬為流鴨 (万235)

【或本云】王 神座者 雲隱 伊加土山尔 宮敷座

●珠藻刈 敏馬乎過 夏草之 野嶋之埼尔 舟近著奴 (万250)

●【一本云】處女乎過而 夏草乃 野嶋我埼尔 伊保里為吾等者

●淡海乃海 夕浪千鳥 汝鳴者 情毛思努尔 古所レ念 (万266)

●於保夫祢尔 麻可治之自奴伎 宇奈波良乎 許藝弓天和多流 月人乎登祐 (万3611)

【人麻呂歌集】

●戀死 戀死哉 我妹 吾家門 過行 (万2401)

●春楊 葛山 発雲 立座 妹念 (万2453)

●足常 母養子 眉隱 隱在妹 見依鴨 (万2495)

「從四位下柿本朝臣佐留卒す」(708年・和銅元年)『続日本紀』

【東歌】

●筑波祢尔 由伎可母布良留 伊奈乎可母 加奈思吉兒呂我 尔努保佐流可母 (万3351)

- 信濃道者 伊麻能波里美知 可里婆祢尔 安思布麻之牟奈 久都波氣和我世
(万3399)

- 鳥が鳴く吾妻 (万1807)

詠ニ勝鹿(かつしか)真間娘子一(ままのをとめ)歌一首。高橋蟲磨之歌集中出。

鶏(とり)が鳴く 吾妻(あづま)の國に 古(いにしへ)に 有りける事と 至レ今(いままでに) 不レ絶(たえず)言ひ來(ける) 勝壯鹿(かつしか)の 真間の手兒奈(たこな)が 麻衣(あさぎぬ)に 、、(万1807)

【原文】

詠ニ勝鹿真間娘子一首并短歌

鶏鳴 吾妻乃國尔 古昔尔 有家留事登 至レ今 不レ絶言來 勝壯鹿乃 真間乃手兒奈
我 麻衣尔、

中国語に南蛮駄舌という成句がある。「鳥が鳴く吾妻」は、それをふまえたものであろう。

【防人の歌】

- 於保吉美 美許等可之古美 伊蘇尔布理 宇乃波良和多流 知々波々乎於伎弓
(万4328)

- 佐伎毛利尔 由久波多我世登 刀布比登乎 美流我登毛之佐 毛乃母比毛世受
(万4425)

【古代の日本語】

ラ行音が語頭に立つことはなかった。

濁音が語頭に立つことはなかった。

「ン」という音節はなかった。

「キャ・キュ・キョ」などの音はなかった。

【古代の中国語】

喉音[x-][h-]や有気音[kh-][th-][ph-]があった。

韻尾に[-k][-t][-p]や[-n][-m][-ng]があった。

頭子音と主母音の間に介音(わたり音)[-i][-u][-iu-]などがあった。

上古音には入りわたり音[h-]があり、[(h)m-][(h)l-]などの音があった。

【史(ふひと)の役割】

朝鮮半島では李朝時代にハングルができるまで漢字だけで朝鮮語を表記していた。

日本の史(ふひと)の多くは朝鮮半島の出身だった。

○誓記体(朝鮮語の語順で書く)

○吏読(朝鮮語の助詞などを音または訓で表記して補う)

○郷札(実質的意味を持つ部分は訓で表記し、文法的要素は音で書くのを原則とする)

万葉集のなかの弥生音

○万葉集にはラ行ではじまることばは一つしかない。「力士舞」

【音韻転移の法則】

1. 調音の位置が同じ音は転移しやすい。
2. 調音の方法が同じ音は転移しやすい。

中国語のラ行音は日本語では転移する。

○た行への転移（調音の位置が同じ）：例[liat]（レイ・たとえる）、頼[lat]（ライ・たよる）、列[liat]（レツ・つらなる）、粒[liəp]（リュウ・つぶ）、立[liəp]（リツ・たつ）、瀧[leong]（リュウ・たき）、嶺[lieng]（リョウ・たけ）、龍[liong]（リュウ・たつ）

○な行への転移（調音の位置が同じ）：浪[lang]（ロウ・なみ）、梨[liet]（リ・なし）、鍊[lian]（レン・ねる）、

○ま行への転移（調音の位置に近い）：覧[lam]（ラン・みる）、乱[luan]（ラン・みだれる）、棕[liang]（リョウ・セイ・むく）、両[liang]（リョウ・もろ）、戻[lyet]（レイ・もどる）、

○来母[l-]の脱落（[-i-]介音が媒介）：陸[liuk]（リク・おか）、陵[liəng]（リョウ・おか）、綾[liəng]（リョウ・あや）、良[liang]（リョウ・よき）、梁[liang]（リョウ・やな）、療[liô]（リョウ・いやす）、柳[liu]（リュウ・やなぎ）、

中国語の韻尾[-n][-m]は日本語では転移する。

○日本語では韻尾に母音が添加される。君[giuən]（クン・きみ）、殿[dyən]（デン・との）、絹[kyuan]（ケン・きぬ）、浜[pien]（ヒン・はま）、肝[kan]（カン・きも）、混[huən]（コン・こむ）、困[khuən]（コン・こまる）、兼[kiem]（ケン・かねる）、

○上代中国語音は[-t]だった。（調音の位置が同じ）：腕[uan]（ワン・うで）、肩[kyan]（ケン・かた）、堅[kyen]（ケン・かたい）、断[duan]（ダン・たつ）、琴[giuəm]（キン・こと）、音[iəm]（オン・おと）、鉢[-]（ハツ・はち）・本[puən]（ホン・もと）、

○ら行へ転移する（調音の位置が同じ）：漢[xan]（カン・から）、雁[ngean]（ガン・かり）、昏[xuə]（コン・くれ）、辺[pyen]（ヘン・へり）、塵[dien]（ジン・ちり）、

万葉集のことばの起源

つぎの歌は、万葉集でも屈指の秀歌とされる天智天皇の歌である。

[日本語原文]

渡津海乃 豊旗雲爾 伊理比紗之 今夜乃月夜 清明己曾（万15）

[日本語読みくだし]

渡津海の 豊旗雲に 入日さし 今夜の月夜 清明けくこそ

「清明己曾」の読み方

- すみあかくこそ (旧訓)、●あきらけくこそ (賀茂真淵)、●さやにてりこそ (佐々木信綱)、
- きよくあかりこそ (武田祐吉)、●さやけかりこそ (斎藤茂吉)、●きよらけくこそ (折口信夫)、●まさやかにこそ (沢瀉久孝)、

[中国語訳]

滄海靡旌雲 諼[言速]*映斜曛 占知今夜月 輝素必可欣 (その1)

洋洋大海上 落日照雲彩 今夜的月光 清明定加倍 (その2)

[朝鮮語訳]

大(han) 海(pa da) 横(ka ro) gil ge ppeol chin 雲(ku reum) e ji neun 太陽(hae) 光(pit) in 今日(o neul) 晩(pam)月(tal) eun 明(palk) ge 照(pi chwo) ju oet eu myeon

この歌も構文は朝鮮語と同じであり、語彙は中国語や朝鮮語から取り入れている。万葉集の歌は中国語や朝鮮語の知識がなければ、ただしく理解することは困難である。

○「わたつみの」： 海にかかる枕詞である。朝鮮語では海は海(pada)である。「わたつみの」は「わた (朝鮮語の海・pada)・つ・み (日本語の海・うみ)・の」と分析することができる。朝鮮語の海(pada)と日本語の海「うみ」を重ねた両点 (二か国語併記) である。

「つ」は古代日本語の助詞で、沖つ鳥、庭つ鳥などの「つ」と同じで「の」にあたる。

○海[(h)muə*] (カイ・うみ)： 海[xuə] は毎[muə] と声符が同じである。上古音には入りわたり音(h-) があり、入りわたり音(h-) が発達したものが海[xuə] となり、入りわたり音が脱落したものが毎[muə] になったと考えられる。

日本語の海 (うみ) は馬[mea]、梅[muə] などと同じように語頭に母音が添加されたものである。

○「とよはたぐも」： 「とよはたぐも」は「豊かな旗のような雲」と解するのが一般的である。しかし、「はた」はやはり朝鮮語の海(pada)ではなかろうか。「とよはたぐも」は「豊かな海雲」ということになり、「豊かな大きな海雲に日がさして」という情景が浮かびあがってくる。

○雲： 日本語の雲「くも」は古代中国語の雲[hiuən] の弥生音 (8世紀以前の借用語音) である。「雲」の上古音は雲[huən*]に近い音であったと考えられるが、隋唐の時代に入ると[-i-] 介音の発達により頭音の[h-] が失われた。

朝鮮語の「雲」は雲(ku reum) である。大野晋は『日本語の起源』(岩波新書一九五七年、旧版) のなかで、日本語の「雲」は朝鮮語の雲(ku reum) が語源であろうとしている。しかし、朝鮮語の雲(ku reum)も、日本語の雲(くも)も中国語の上古音、雲[hiuən*]

と同系のことばである可能性がある。

同じように中国語の頭音[h-]が脱落した例としては熊[(h)iuəm*/iuəŋ] (ユウ・くま)、煙[(h)yen*/yen] (エン・けむり)をあげることができる。

○入： 古代中国語の「入」は入[njiəp]である。現代の朝鮮語では中国語の日母[nj-]は規則的に脱落し入(ip)となる。

韻尾の[-p]は日本漢字音では[-t]になることが多い。接[tziap]、雑[dzəp]、立[liəp]などの日本漢字音は、接「セツ」、雑「ザツ」、立「リツ」であり、中国語原音の[-p]は[-t]であらわれている。韻尾の[-t]は朝鮮漢字音では規則的に[-l]になるから、「入」は入「いる」になったと考えられる。

[-p]がラ行音であられる例：汁[tjiəp] (ジュウ・しる)、摺[ziəp] (シュウ・する)、

○日： 朝鮮漢字音では「日」も日(il)であり、朝鮮語では日(hae)である。「入り日」は「いり (朝鮮語漢字音の日・il) ひ (朝鮮語の日・hae)」をかけた両点 (二か国語表記) である可能性がある。「入り日」は「沈む日」と「日」の朝鮮漢字音(il)と朝鮮語の日(hae)を掛けた、ことば遊びの要素があるものと考えられる。

○「射す」： 唐代中国語音の射[syja]である。また、朝鮮漢字音は射(sa)である。射「さす」は中国語語源である。

○「清」： 「清」の古代中国語音は清[tsieng]だとされている。古代中国語音の[tsi-]は謎が多く、清[tsieng]の上古音は清[kieng*]あるいは清[xieng*]であり、それが摩擦音化して唐代には清[tsieng]になり、日本漢字音では清(セイ)になったと考えることができる。青島の中国語音は青島(Qingdao)である。「清」の中国語方言音、ベトナム漢字音、朝鮮漢字音は、つぎの通りである。

	北京語	上海語	福建語	広東語	ベトナム語	朝鮮語
清	qing	qin	chheng	ching	thanh	cheong

「清」は南に行くほど日本語のタ行に近く、北に行くと日本語のカ行に近くなる。

漢字のなかには同じ声符をサ行とカ行に読み分けるものがいくつかみられる。

例：腎(ジン)・賢(ケン)、神(シン)・坤(コン)、松(ショウ)・公(コウ)、車(シャ)・庫(コ)、信(シン)・言(ゲン)、枝(シ)・技(ギ)、止(シ)・企(キ)、また、訓ではカ行であられ、音ではサ行であられるものもある。

例：辛[sien] (シン・からい)、神[djien] (シン・かみ)、浄[-] (ジョウ・きよい)、鐘[tjiong] (ショウ・かね)、切[tsyet] (セツ・きる)、声[thjieng/sjieng] (セイ・こえ)、一般に訓の方が古く、音のほうが新しい。「辛」「神」の場合を例に考えると、上古音は辛[xien*]、神[hien*]のような喉音であり、それが隋唐の時代になって口蓋化により辛[sien]、神[djien/zjien]に変化したと考えられる。この歌の語源をたどってみると、つぎのように分析することができる。

朝鮮語：わた（海・pada）、はた（海・pada）、雲(ku reum)、ひ（日・hae）
 中国語：海[muə*/xuə]（うみ）、雲[hiuən*]（くも）、入[njiəp]（いる）、射[djyak*/syja]
 （さす）、今夜[kiəm jyak]（こよひ）、清[xieng*/tsieng]（きよき）、
 日本語：豊（とよ）、月（つき）、つ、の、とよ、に、

月（つき）は朝鮮語の月(tal) と関係のあることばである可能性がある。以上を総合すると、この歌は「海の 豊かな海雲に 日が射して 今夜の月は さぞ清らかだろろう」という思いを、朝鮮語と日本語で、技巧的に表現したものであるといえる。

日本語の起源はどこまでわかったか

万葉集の日本語には弥生時代のはじめ以来約千年にわたる、中国文明との接触の結果取り入れられた中国語の語彙が多く含まれていることがわかる。

それらの語彙は朝鮮漢字音の影響をうけたものも多く、8世紀の中国語音と異なるため一般にやまとことばとされてきたが、上古中国語と同源である。これを仮に弥生音（弥生時代から古墳時代を通じて、前3世紀ころから7世紀までの長きにわたって米や鉄の文化とともに日本語のなかに入ってきた語彙）と呼ぶとことにすると、やまとことばには二つの層があると考えられる。

訓 1	訓 2	音 1	音 2
原やまとことば	弥生音	呉音	漢音

万葉集の日本語は文法的には朝鮮語と同じ膠着語であり、「てにをは」などの助詞を多く使う。また用言には活用がある。語順も朝鮮語と同じである。

これに対して中国語の語順は日本語や朝鮮語と違い、一語が一音節であり、活用形もない孤立語である。しかし、中国語は日本語や朝鮮語が文字をもたなかった時代から文字文化をもった言語であり、朝鮮語や日本語の語彙にも大きな影響を与えた。